

元東急6000系に熱い視線

弘南鉄道大鰐線車両

ファンによる貸し切りイベントが行われており、その回数が増加傾向だ。

かつて首都圏住民の足として活躍した列車で、現在弘南鉄道大鰐線を走る元東急6000系に鉄道ファンの熱い視線が注がれている。製造から半世紀経過し、走行可能なのは同鉄道にある2両だけ。数年前からフ

「昭和の名作」ファンら撮影会企画

増える貸し切り運行



鉄道ファン注目の元東急6000系。貸し切り運行、撮影会が年々増えている

元東急6000系は1960年に登場した列車で、89年に同鉄道が4両譲り受けた。国内初のステンレスカーで、丸みを帯びたボディーに特徴がある。

故障しても交換する部品はもう生産していないため、同鉄道では2両を走行用とし、残る2両を部品調達用にしていく。老朽化で一度は退いたものの、農村風景に囲まれ余生を送る姿を一目見ようという、各地から訪れる鉄道ファンで、これまで有志とともに撮影会を5回企画した東京

在住の会社員金上努さん(38)は、「懐かしいし、自然の中を走る風景は最高」と魅力を語る。県内の大学にいた期間があり、何度なく6000系の写真撮影に訪れていた。就職で東京に戻った今も弘南鉄道を思い出し、「できるなら毎日列車に乗ってあげたいし、応援したい」と話す。

金上さんが7月25日に開いた撮影会には首都圏などから15人が参加した。走行前日には列車を清掃し、前面にグリーンのラインを

引いて「50th」などと書いた特製ヘッドマークを装着した。当日は午前に行き風を撮影、昼は車内で弁当を食べ、午後から再び撮影を行った。最後に乗車して締めくく

り、6000系尽くしの一日だった。参加者は写真、動画撮影のほかに、走行中の音や車内

の各部品に着目してイベントを満喫した。東京から参加した40代男性は大鰐線沿線に住んでいたことがあり、「子供のころに走る姿を見たし、よく乗った。6000系はもとと生産数が少ない。今は誰も造れないし、造る工場もない。昭和を感じる名作」と話した。

同鉄道では6000系の中田正志主務者は「撮影だけでなく、掃除もしてくれる鉄道愛好家もいる。列車を大事にしてもらってありがたい」と感謝し、「沿線住民から『6000系は今度いつ走るの?』と問い合わせもある。イベントを通じて弘南鉄道の魅力が全国に広がっていくと活性化にもつながる」と歓迎していた。

同鉄道業務部営業課

の1回10万円ほどかかる。

9月6日
月曜日

陸奥新報社

〒036-8356 弘前市下白銀町2の1

☎ 0172-34-3111 (代表)

©陸奥新報社2010